基調講演Ⅰ「発掘調査から見た広島県の中世城館」

(公財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員　　小都　　隆

ただいま紹介いただきました小都と申します。よろしくお願いいたします。

今日の話は正面のスライドで見ながら聞いていただきたいと思います。ただ，私は話が苦手なものですから，十分に伝わらないところがあろうかと思います。その点につきましては，資料集の27ページから42ページに今日お話する内容を全て書いております。後からでもこれを見ていただきたいと思います。

それともう一つ，今日の話の中で個別の城が115か所あるのですけれども，その具体的なデータにつきましては，この記録集の一番最後に一覧表を付けております（117～119ページ）。ですから，足りないところはその辺も見ていただくということで話を進めさせていただきたいと思います。

それでは，早速話を始めたいと思います。広島県の城館遺跡ですが，これは皆さん，軍事施設と考えておられると思いますけれども，本日のテーマでもありますように城館遺跡にはいろいろな機能があるわけです。そういったことで今回は，発掘された城館遺跡から何が分かるかということで話を進めていきたいと思います。

広島県内の城館遺跡は，午前中理事長さんの挨拶で県内に1,500か所程度あるというお話でしたけれども，実はそのうち，データがきちんと集まって報告されたものは1,315か所あります。これは1996年までに広島県教育委員会が行った『中世城館遺跡総合調査』で，その報告書が出ておりまして，この中に1,315か所のうちの約1,100か所の図面が掲載されております。これによって城の細かいことが分かるようになってき

たということであります。

その特色といいますと規模の小さいものが多いということ。そして当時の記録が残るもの，すなわち後の時代の人が書いたものではなくて，同時代史料で城館が確認できるものは約１割しかないということであります。つまり，そのほかのほとんどの城館遺跡というのは何かよく分からないというのが広島県の実態であります。

それともう一つ，発掘調査例ですけれども，これは2010年までの段階で県内で115か所が発掘調査されております。つまり，先ほど言いましたように，県内に約1,300か所の城館遺跡がありますけれども，そのうち城主が分かっているものが約１割，発掘調査されたものも１割程度しかないということであり，これは，全体としてはほとんどが分かってないということであります。

こういったことを頭に入れていただいたうえで話を進めていきたいと思います。

発掘調査された城館遺跡の遺構の概要ですけれども，午前中からいろいろ話がありましたが，郭，堀切，土塁，建物跡，土坑などといろいろなものがあります。このうち城館遺跡を特色づける個別の郭は広島県の場合，小さいんですね。ほとんどが200㎡から600㎡ぐらいのものです。大きくなるのは新しくなってからということです。ですから，皆さん方が有名な大きい城に行かれて，郭は大きいと思われますけれども，そんなものは少なくてほとんどが小さいということです。

それと，もう一つの特色は堀切ですね。これは城館遺跡の80％にあります。これは山と谷しかないという広島県の地形の特色から，堀切でもって城域を区画するということであります。

また，土塁は約半数の城館遺跡で見られます。そういったことで山へ行って，それが城かどうか判断がつかいないときには，郭と堀切と土塁を見れば大体見当がつくということであります。

建物については，発掘調査されたものの60％に見られますけれども，これは小さな掘立柱建物がほとんどです。今日午前中の家ノ城跡のスライドでご覧になられたよう

なものですね。穴を掘って柱を立てるだけのものということです。井戸は約１割に見られ，素掘のものと石組のものがあります。

石垣は，隅をもつ本格的な石垣が出てくるのは16世紀の後半です。それまでは土留のための石積みということになります。

次に，出土遺物ですけれども，生活用具である土器類はよく見られます。土器類の中でも土師質土器，つまり素焼きの土器は，大体80％ぐらいの城から出ています。これは一つの遺跡から数万点出たものから，１点２点しか出ないものを含めての話ですけれども，そういった状況があると。これが城館遺跡の年代決定の一番有効な手段になるということであります。古銭は大体44％，鉄釘が50％ぐらいの城館遺跡から出てきます。ただ釘については，鋳直して鉄素材として使うこともあるということで，必ずしも道具としての釘だけの用途ではないということもあります。そのほか，石製品，木製品もあります。生活用具のほかには，威信財・贅沢品や，鉄滓にみられる鍛冶や農具など生産関係のもの，祭祀・遊戯に関わるもの，武具類が出てきます。

こういった出土遺物と遺構との状況を総合していくと，その城館遺跡がどういう機能があり役割をもっていたかということが大ざっぱに分かってきます。

つまり，たくさんの遺構があり，たくさんの遺物が出るところでは，当然そこで何らかの人間の生活があったということになります。

それに対して遺物がほとんど，あるいは全く出ない，遺構もほとんど分からない，今日の報告では城平山城跡では，遺物はほとんど出てこないわけですけれども，そういったものもあるということです。

その比率を比べて，それらが出るもの，ここでは生活の場と書いていますけれども55％，ほとんど出ないのが45％ということになります。城館遺跡を発掘調査すれば何か出るというのも，これは思い込みでありまして，半分程度は何も出ない，何も分からないというのが実態かと思います。

もう一つは，分布調査で分かった成果ですけれども，これは先ほど言いましたよう

に，広島県の城館遺跡の特色というのは規模が小さいのが特色であります。3,000㎡より小さい城というのが55％で一番多いわけです。それより大きく12,000㎡までのものが34％。12,000㎡を超す大きなものは11％しかないということです。ですから，皆さんが連想される毛利氏の郡山城跡とか小早川氏の新高山城跡といった大規模なものは，もう例外と考えていただいて結構かと思います。

生活度	恒久的施設			臨時的施設		
比高・規模	～3,000㎡	～12,000㎡	12,001㎡～	～3,000㎡	～12,000㎡	12,001㎡～
51m～	城	城	城	陣	陣	陣
～50m	城	城	城	砦・陣	陣	―
～20m	屋敷	屋敷	平城	砦	―	―
～10m	屋敷	屋敷	屋敷・平城	―	―	―

【スライド１】中世城館の分類方法

次に城館遺跡の高さですけれども，高さも低いものから高いものまであります。50ｍ以上の一応山と考えられるものが54％あります。それに対して50ｍ未満で20ｍ以上のもの24％，20ｍ未満のものが22％となります。

ですから，これを総合しますと，小さくて山にあるのが広島県の城館遺跡の特色ということができるかと思います。

そういったことで，これらのデータを用いて広島県の城館遺跡を考えてみます。

まず生活のあるなしということで，ここでは恒久的施設と書いていますけれども，生活が行われたものは，先ほども言いましたように55％があります。それはどういうところにあるかというと，高さと規模で見てみると，高さが低く麓の方にあるのはおおまかに屋敷で，そのうち，規模が著しく大きなものは平城となります。広島県では広島城跡とか三原城跡があります。50ｍ以上と高く山の上にあると城と呼ばれています。

それに対して，生活がほとんど行われていない臨時的施設では，平地にはほとんど何もありません。集落の裏のちょっと高いところの丘陵には生活感のない小さな砦，それより高いところの山には戦乱に備えた施設である陣，これは軍事に特化した施設で高い山に出てくるというのが分かってきます。

そういった要素を総合して分類すると，恒久的施設で生活が行われた施設では，城，屋敷，平城に，臨時的施設で生活がほとんど行われない施設では陣，砦があるということになろうかと思います【スライド１】。

この細かい内容につきましては，【スライド２】の中世城館の分類や資料にも示していますように，さらに細かく分けることができようかと思います。

恒久的施設である城は，ほとんどが領主の本拠で，日常的に維持・管理が行われるものです。山の上ですから維持・管理しないと，すぐに傷んでしまうわけです。そういったことで一般的には山城といわれています。それも小さいものから大きいものまでいろいろあります。広島県では，先ほども言いましたように小さいものが多いというのが特色です。

屋敷は，防御施設を備えた生活の本拠です。ですから単なる生活の場ではなくて，城の機能をもった屋敷ということになります。これには平地を堀で方形に区画して，その土でもって土塁をこしらえて，方形の屋敷地をこしらえた方形館と，丘陵先端部の背後を削って，その上に一つの郭を設けた館城，そして城の麓に石垣で画した屋敷を設けた館があります。こういった形が違うものが屋敷の中にもあります。

平城は，城を麓におろし複数の郭をもつ広大なもので，これは時期的にも構造的にも特殊なものと考えていいと思います。

臨時的施設の陣については，軍事施設ですから本拠に対して附属する支城や見張り，境界の守りなどに用いられた出城，それに対応する陣城といわれるも

	種別	内容　小分類
恒久的施設	城	領主の本拠。日常的な維持・管理と生活。山城。 小規模城　3,000㎡未満。 中規模城　12,000㎡未満。 大規模城　12,000㎡以上。
	屋敷	防御機能を備えた生活の本拠。耕地に隣接。出土遺物多い。 方形館　平地・微高地を横堀と土塁で方形に区画。 館城　低丘陵背後を掘り切り土塁。 館城　正面に石垣を持つ大きな屋敷。主にⅣ期。
	平城	大名の政庁など。平地に水堀や石垣による複数の郭を持つ。 瓦葺建物。Ⅳ期。
臨時的施設	陣	臨時的な軍事施設。造成は不十分。出土遺物は少ない。 出城　本城に対する支城。見張りなど。主にⅡ期。 陣城　城攻めのための臨時施設。
	砦	生活感のない小さな臨時的施設。遺構は貧弱。Ⅰ・Ⅱ期。 集落の裏山などの低丘陵。「村の城」

【スライド２】中世城館の分類

のがありますけれども，これは発掘調査では区別が困難です。

もう一つ特色があるのは，中世城館の分類の表の一番下に書いた砦です。これが県内では特徴的なものです。集落の裏山にあり，生活感のない小さな臨時的施設で，遺構は貧弱で，時期的には戦国前期以前に特徴的にみられるというようなことで，領主ではなく村に関わる城という考え方をしています。

細かく分類した城館遺跡も時代によっていろいろ変化があります。先ほどの分類と，今から述べます使用年代でもってさらに細かく検討していく必要があろうかと思います。

次に城館遺跡の年代ですけれども，調査でいろいろなところへ行くとよく「うちの城は古いんじゃ」とか「ここは鎌倉時代に使われた城と伝えられている」とか言われることがありますが，現在，広島県内の発掘調査で確認されたものでは，今日午前中に報告された家ノ城跡がそうですけれども，古くて14世紀の南北朝期のもので，ほとんどがそれより新しいものです。

この年代を決定するのは考古学的資料，先ほど言いましたように出土遺物で行います。同時代史料が残ってるものについては，それも併用していますが，現在のところ鎌倉時代に遡るものは明らかではありません。

ここでは，中世城館遺跡の使用時期は出土遺物により比定し，それを地域の政治的状況から大きく４期に区分しました。Ⅰ期は15世紀の前半以前で南北朝・室町期，Ⅱ期は15世紀の後半から16世紀前半までで戦国前期としています。これは応仁の乱より後ということで，広島県では，毛利氏とか吉川氏・小早川氏とかの国人領主が成長していく時期であります。Ⅲ期は16世紀第３四半期で戦国後期としています。広島県では弘治元年（1555）の毛利元就の厳島合戦より後の時期です。つまり，この時期県内は毛利氏がほとんど掌握して，他国へ進出していく時期が戦国後期となります。ですから，広島県に即して言えば，Ⅱ期からⅢ期というのは，毛利氏の動きと連動しているということになります。

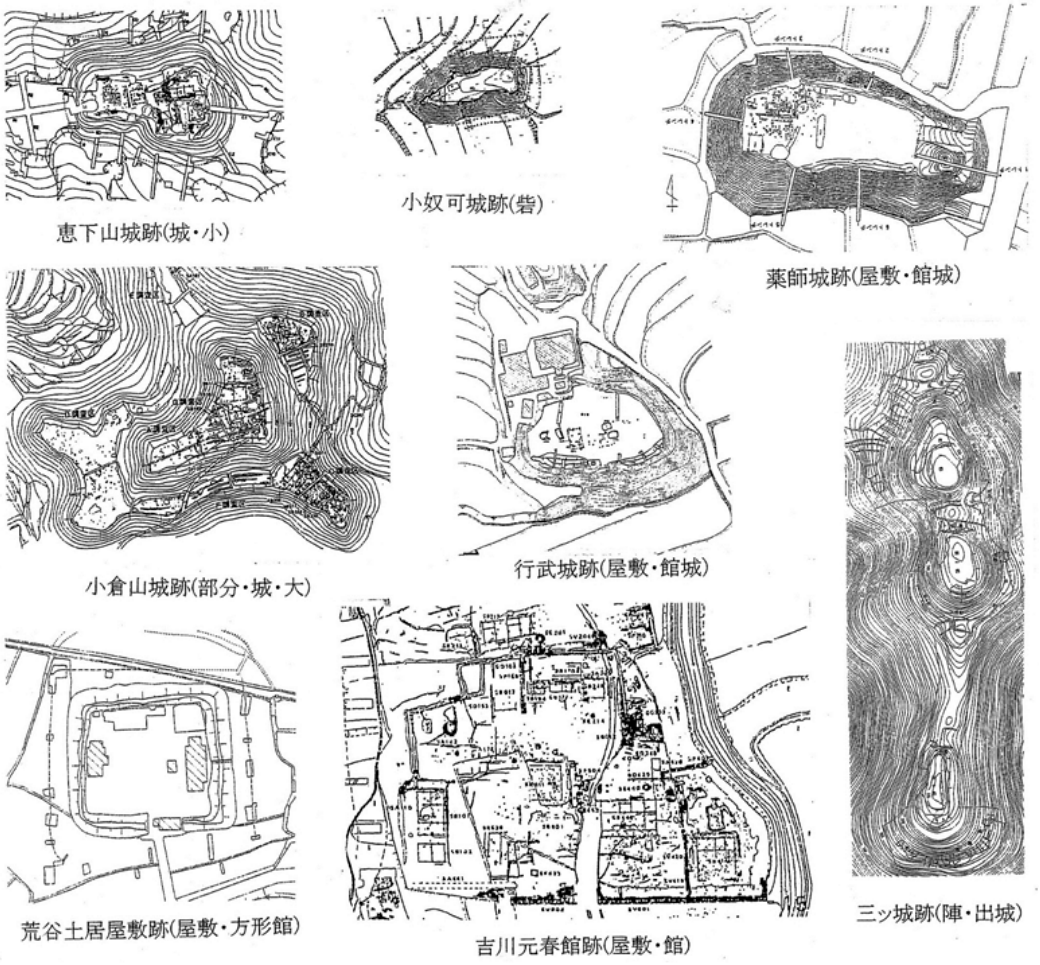
その次の第Ⅳ期は織豊期と呼んでいます。これは，天正10年（1582）本能寺の変で信長が討たれ，その時に高松城の水攻めで秀吉と毛利氏は和睦するわけですけれども，その後には毛利氏は豊臣大名になります。ですから，これでまた中世城館の様子もがらりと変わってくるということですね。

そういったことで広島県の中世城館の時代というのは，大体大きく４時期に分かれると考えております。日本史的にいいますと，織豊期というのは近世ですけれども，広島県では毛利氏との関係ということで，本日は織豊期も中世の中に含めてお話をさせていただきたいと思っています。

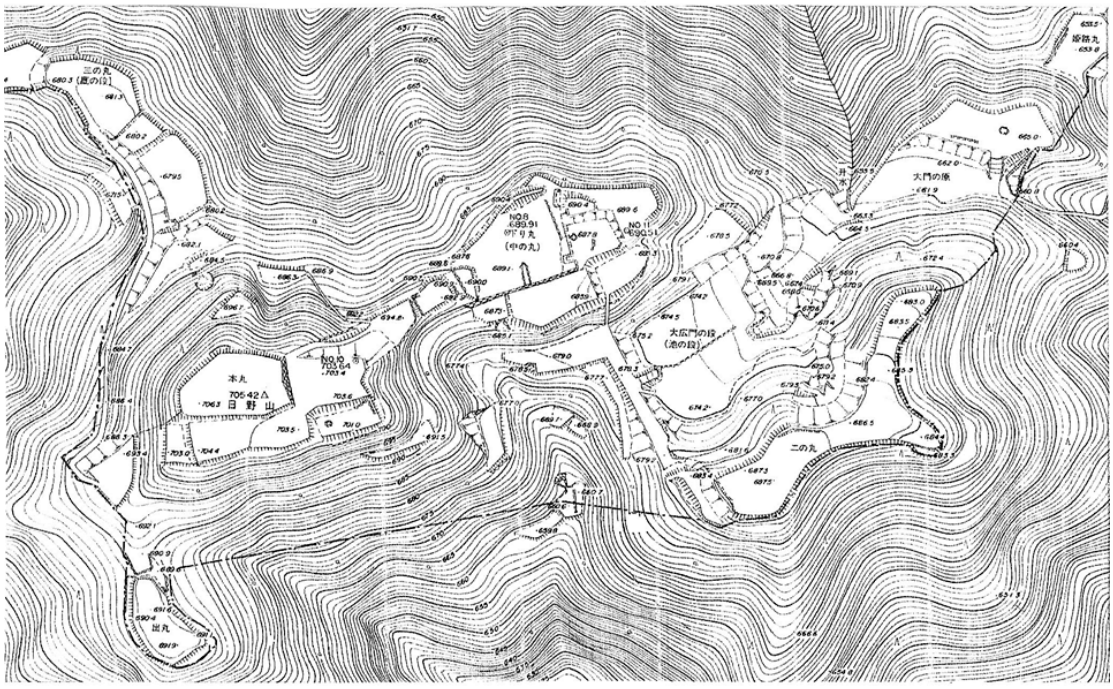
ところで，先ほど城館遺跡の分類を述べましたが，城館遺跡にはいろいろなものがあります。

これは，画面【スライド３】では大きさは分かりませんけれども，資料【図１】の方では縮尺を2,000分の１に統一しています。ですから，これで大きさを見ていただければと思います。【スライド３】の左上は広島市安佐北区にある恵下山城跡です。その下にあるのは北広島町にある吉川氏の小倉山城跡です。これらが城です。城には，こういった小さいものや中程度のもののほかに，【スライド４】は，吉川氏が16世紀後半に築いた北広島町の日山城跡ですけども，こういった大きいものもあります。これは，【スライド３】と【スライド４】を比べていただくとお分かりのように，城にも大きいものと小さいものがあるということです。そして，恵下山城跡は14世紀の城ですけども，その下の小倉山城は15世紀から16世紀前半の城です。そして，これ（日山城）が16世紀後半の城と，城にも構造や大きさに発展段階があるということがお分かりかと思います。

次に屋敷ですけども，屋敷には【スライド３】の左下にありますように，平地に堀を方形に囲んだ方形館と，【スライド３】の右上にありますように丘陵先端の背後を掘り切って，郭をこしらえる館城といわれるものがあります。この館城は，山の多い広島県では立地的に造りやすいことからこういったタイプのものが多いというわけで



【スライド３】広島県の中世城館１



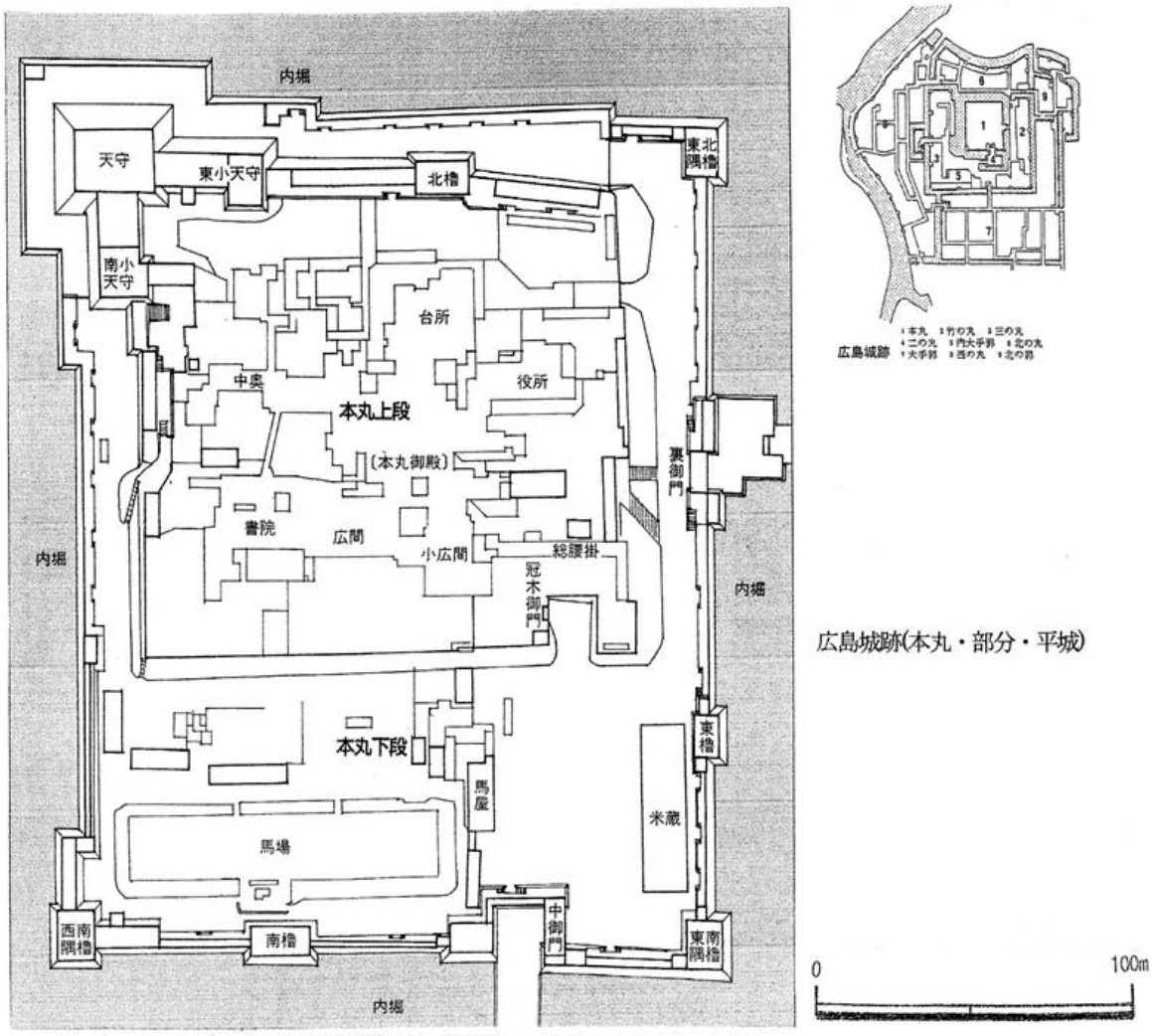
日山城跡(部分・城・大)

【スライド４】広島県尾中世城館２

すね。【スライド３】の右上は東広島市の薬師城跡，【スライド３】の中央は三原市の行武城跡です。いずれも発掘調査されて建物跡等が見つかっています。

16世紀の後半になると，こういったものだけではなくて，大名が大きな館をこしらえます。【スライド３】の下中央は北広島町の吉川元春館跡です。これを見ていただくとお分かりのように，ここからここまでが110ｍ，１町ですね。ですから，それまでの小規模な方形館や館城から，こういった大きいものに変わっていくということがお分かりかと思います。

もう一つ，恒久的な施設として平城があります。これは広島城跡【スライド５】で，本丸の大きさが大体これだけです。ですから，大きさの比較のためにこれを出してる



三浦正幸原図(『広島城』歴史群像名城シリーズ９　1995 より)

【スライド５】広島県の中世（近世）城館３

んですけれども，広島城跡そのものは天守閣のあるところから，この会場である広島県民文化センターに近い電車通りまで約１kmが城域なんですね。ですから，全体で言えばこんなに広い，その中の本丸はここですけども，本丸だけでこれだけの広さがあるということです。ですから，これは年代的なものと権力との関係で，こういった変化があるということがお分かりかと思います。

次に，臨時的な施設ですけども，臨時的な施設にはこういった，【スライド３】の右下の陣と呼ばれるものがあります。これは広島市安芸区の三ッ城跡で，尾根を利用したもので，ほとんど遺構がありませんが，堀切で尾根を区切り，両側に畝状竪堀群をめぐらしたものです。

そして，もう一つの生活の痕跡のないものとして，砦があります。【スライド３】の上の中央は北広島町の小奴可城跡です。ほとんど生活痕跡がない，ただの丘ということですね。ただ平坦面があって，掘立柱の建物が２棟出ています。

以上が大体城館遺跡の概要ということになります。

それでは，次にスライドで城跡の写真を見ていただきます。

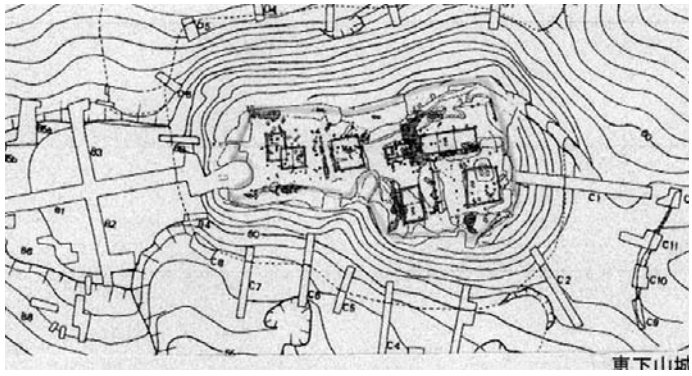
これが城の中でも小さい小規模城です【スライド６】。これは北広島町大朝の枝の宮八幡神社の裏にある枝の城跡です。初期段階の城というのは，こういった感じなんですね。こちらから尾根が延びてきておりますけれども，尾根の後ろを掘り切るだけなんです。ほとんど加工がない。上に平坦面を二段こしらえています。この前には現在も家がありますけれども，当

【スライド６】枝の城跡全景

時も同じで，つまり家の裏に山があって，紛争がおきた時には，家から裏の山に逃げて立て籠るというための城であります。次にこれも同じタイプの城です。これは約40年以上前，私が就職したころに発掘調査に参加したんですけれども，広島市安佐北区の高陽ニュータウン内にある恵下山城跡です【スライド７】。これは団地になる前の写真で，山の上に段が見えます。これが城の本体になります。周囲にもこういった郭がありますけれども，遺構がきちんと残ってるのはここだけです。

【スライド７】発掘調査前の恵下山城跡

これを詳しく見ていくと，こうなります【スライド８】。ちょっとマーカーが薄くて分かりにくいんですけれども，郭の範囲というのは，このマーカーで囲んだ範囲です。この中を石積みで三段に区画して，その中に掘立柱の建物が８棟建っています。ここからは14世紀の遺物がたくさん出ています。この城は14世紀につくられるんですけれども，その後拡張されたようで，ここに堀切があって，この後ろにも郭があります。この前にも郭があります。郭はあるんだけれども遺構が出てこないということですね。ですから使われたのはここ（中心部）だけということになります。午前中に報告があった家ノ城跡の様子とよく似ています。



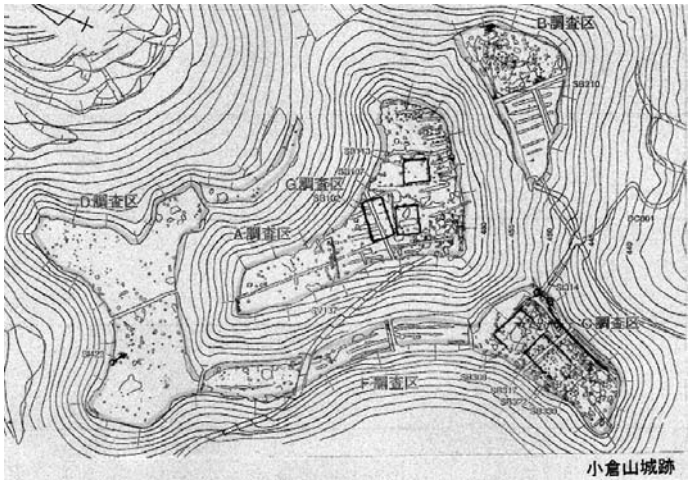
【スライド８】恵下山城跡実測図

15世紀の後半になると，先ほども言いましたように，各地で国人領主が出てきます。それまでの小さな地域の地頭領主から国人領主として力を持ってくるわけですけれども，こうなるとこういった城をこしらえるわけです。これは，北広島町にある吉川氏

の本拠小倉山城跡の写真です【スライド９】。

これは発掘調査時の写真で，城そのものは数万㎡の広さがありますけれども，発掘調査が行われたのは，この本丸郭群のみであります。こういうふうに一番高いところと，その四方に郭を配置しております。写真では小さくて分かりにくいですけれども，それぞれに柱穴とか土坑，溝などいろいろな遺構が見えています。これを図面で見ると，写真の方向とは逆ですけれどもこういうふうになります【スライド10】。つまり，これが一番高いところの郭ですね。その周りにこういった小さい郭を配置していますけれども，これを全部丁寧に掘っていくといろいろなものが分かってきます。頂上の郭から掘立柱の建物が２棟，そして礎石建物が１棟出ておりますけれども，この城は15世紀の後半から16世紀の前半までの約100年間使われており時期差があるわけです。現在小倉山城跡に行かれたら，遺跡整備がしてあるのは，この掘立柱建物の２棟だけで，この礎石建物は時期が異なるということで埋め戻してあります。

【スライド９】小倉山城跡本丸郭群全景



【スライド10】小倉山城跡本丸郭群実測図

この城の特色というのは，このように建物が少ない郭と，たくさんある郭，全くない郭と，郭ごとに遺構の状況が違うことです。そういったことも注意していただきたいと思います。

一番建物が多かった郭は図面右側のＣ調査区と呼んでいるところですけれども，こ

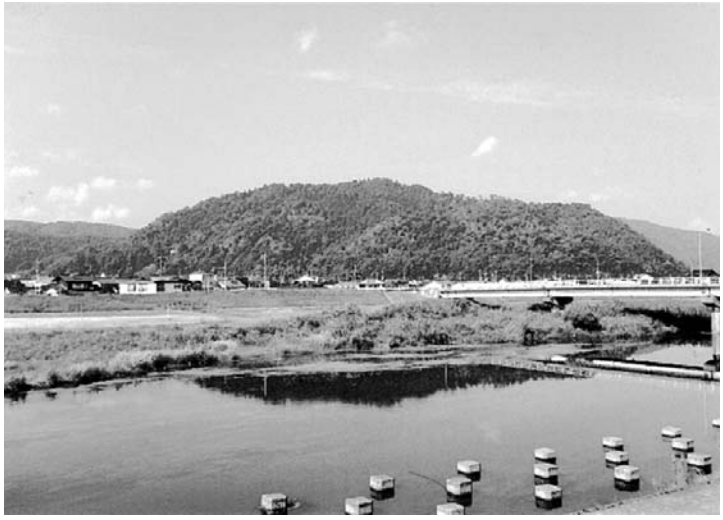
れはここに書いてあるのが登城路ですけれども，道を登ってくると，登ってきたところの終点に門があります。掘立柱建物ですけれども，控え柱をもった棟門です。門に続いて塀があります。塀は一度作ったものをつくり直しています。この塀の痕跡は南側まで続いています。ですから，この門を入ったら，この塀がぐるりと郭を囲んでいたことが分かります。郭の中には，礎石建物と掘立柱建物が１棟ずつありますが，それぞれ建て替えられています。ですから，ここはかなり生活環境の整った重要な郭ということになります。

それに対して，こちら（左）側Ｄ区ですけれども，こちらにはほとんど遺構がありません。ただ，ここに門が出てきています。小倉山城跡には登城道がたくさんありますが，正規のルートというのはこの谷で，これを登ってくるのが大手ではないかと考えています。この門も棟門なんですけれども，間口が2.5ｍで，しかも礎石建物です。ということで，こちらから入ってきて，この郭に入り，ここからぐるっと回ってＦ区やＡ・Ｃ・Ｇ・Ｅ区につながります。こういうふうに城の中で郭ごとに役割分担があったことが分かるのではないかと思います。これが15世紀から16世紀前半にかけての城です。

16世紀の後半になると，国人領主のなかから戦国大名に成長してくるものがでてきます。その代表例として，これは吉川氏の日山城跡です【スライド11】。日山城跡の図面【スライド４】は，先ほど見ていただいたと思いますけれども，これが中枢の郭群があるところで，この部分が本丸，こちら側が二の丸です。

【スライド11】日山城跡遠景（南西より）

真ん中に谷があります。高さが標高でいうと約700ｍ，麓から約300ｍです。山は東西約４㎞，郭の端から端まで東西約700ｍですから，すごく大きな城です。こういったものが16世紀の後半にはつくられるということです。


【スライド12】郡山城跡遠景

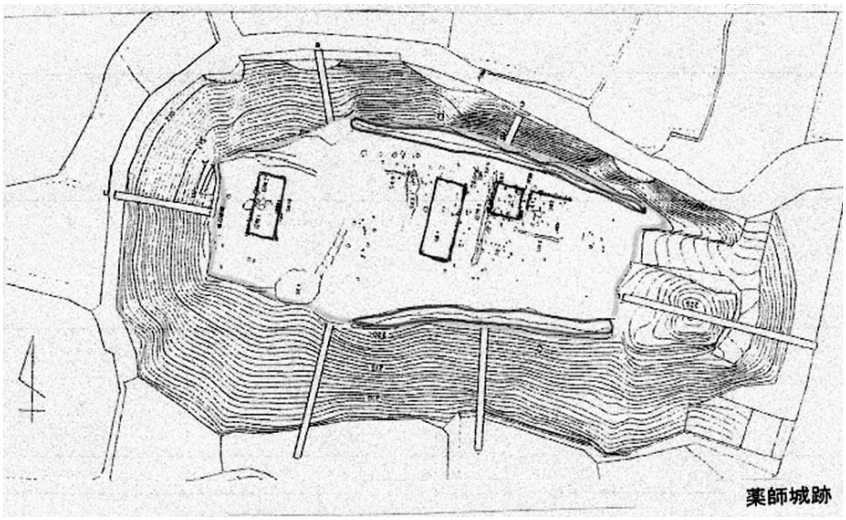
もう一つ，大きい城の代表として，これは安芸高田市にある毛利氏の郡山城跡です【スライド12】。郡山城は，当初，15世紀の城は，郡山の先端のこの部分です。これは本城と呼ばれています。これが16世紀の中頃になって，この山全体に郭を広げていったということであります。これは，図面にしても壮観で，全体で約270の郭があります。最終的には中枢部を石垣の城に改修しています。ですから，これは戦国前期の実用的な城から戦国後期の権力を示す本拠の城，そして織豊期の城へと改修が続けられたことが分かります。

次に，屋敷について述べます。これは先ほど見ていただきました薬師城跡の写真です【スライド13】。こちら側に山がありまして，山から尾根が延びており，その背後を掘り切ってその前だけに一つの郭をこしらえたものです。ですから，今でも屋敷地として十分に使えるものです。

【スライド13】薬師城跡全景

ここでは，最終的に５面の遺構面が確かめられていますが，これは最終段階の写真です。これを図面で見ると，こういうふうになっています【スライド14】。こちら側が山で，ここが堀切で，堀切に面したところに高まりが

ありますけれども，これが土塁の機能をするわけです。更に，両側に土塁をつなぐと土塁で囲まれます。土塁で囲んだ中にこういった建物を並べると城のようになります。現在の屋敷でも，大きなお宅ではこういったものはありますけれども，これが当時，15世紀から16世紀にかけての中小領主の屋敷と考えていいと思います。



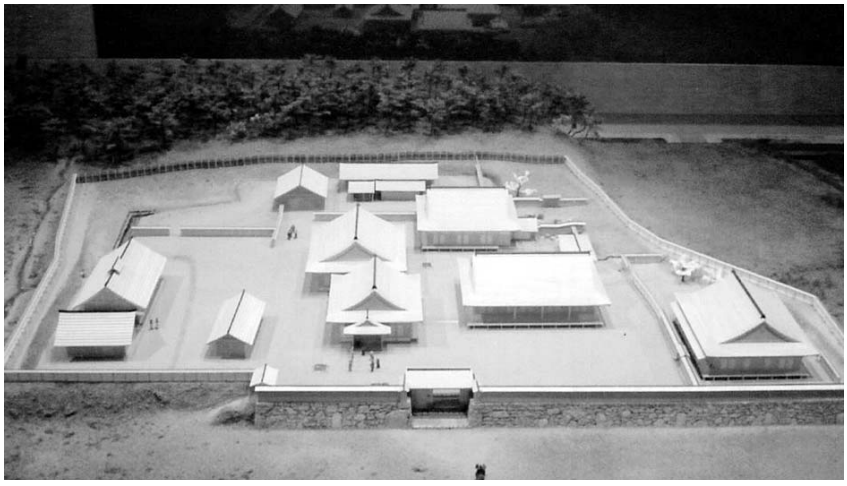
【スライド14】薬師城跡実測図

これは最終的な遺構面の図なので建物が少ないんですけれども，何回も建て替えられています。この中には，ここに祠があります。こちらには，倉庫もあります。この図には載ってませんけれども，一つの屋敷地の中で生活に関わるすべての施設がそろうというのが館城といわれるものです。

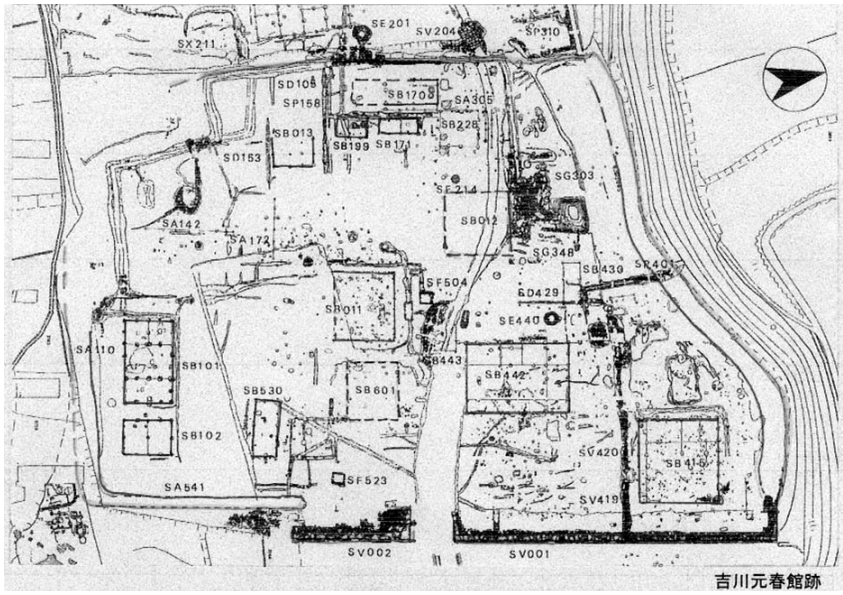
次は，戦国大名の館ですけれども，これは北広島町の吉川元春館跡の現状，整備後の写真です【スライド15】。こちらからこういうふうに丘が延びてきて，この丘を造成して間口110ｍ，奥行80ｍの平坦面をつくっています。ここはもともと細い段丘だったわけですけれども，それを高い所は削り，低いところを埋めて，間口を広げ，屋敷地をこしらえています。ここから10数棟の礎石建物が出ております。これは復元模型ですけれども，現地のガイダンス施設『戦国の庭歴史館』に展示されています【スライド16】。建物10数棟を復元するとこうなるということです。この構造は，来客が正面の門から入ると，広場があって，それを過ぎると遠侍と呼んでいますこの建物に入ります。来客が待機する場所です。ここから右側の主殿に入っていくわけです。ここで当主元春と公式の話をします。公式の話が終わると，この廊下を通ってこの建物に行きます。この建物は会所です。会所には庭園があります。庭園を見ながらゆっくり

する。御苦労さんということですね。侍所の後ろにあるのは当主の常御殿です。ですからこの範囲がお客さんが出入りする場所で，これらの後ろにある小さい建物は，トイレとか風呂とか馬屋とか納戸とかで裏方の空間ですね。こちらには台所があります。ですから，元春館跡では来客が出入りするところと，そうではないところの区別があることが分かります。それを図面で見ると，こういうふうになります【スライド17】。正面から入っていって，こういうふうなルートで対面するということです。ここには番所がありますけれども，来客とそうでない人は区

【スライド15】吉川元春館跡全景（整備後）



【スライド16】吉川元春館跡復元模型



【スライド17】吉川元春館跡実測図

別されます。ここで働いている人はこちら側の通用門から入って，番所でチェックを受けて，こちらに入っていく。つまり，表向きの公的な部分と奥向きの私的な部分が区別されているという状況をみることができます。

もう一つの恒久的施設に平城があります。これは広島城跡です【スライド18】。城が山から平地に降りてくるわけですが，この特色というのは広い水堀です。水堀があって，石垣を持つということ。そして，この写真で見えるところの石垣は低いんですけれども，この天守台では，高い石垣をつくっています。高さ38尺といいますから，11.4mの高さを持つと。これは，その当時の毛利氏の技術だけではできないものです。豊臣政権など，外部の技術を導入しないと難しいと考えられています。そこには，瓦を葺いた礎石の建物が建ちます。これが16世紀の末，1590年代にはこういったものができるということです。

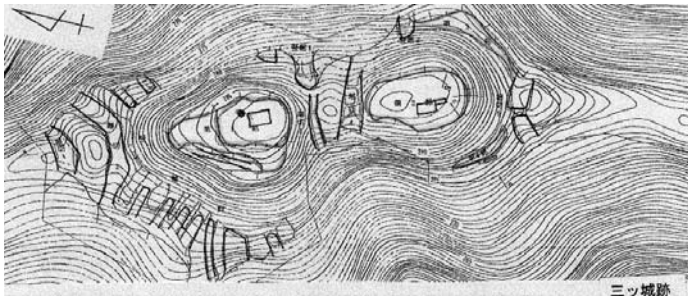
【スライド18】広島城近景・内堀と復元天守

次に，臨時施設です。まず，陣ですけれども，これは広島市安芸区瀬野川にあります三ツ城跡です【スライド19】。全体はこういった細い尾根上にありますけれども，尾根を堀切で区切ってるわけですね。さらに，午前中の話にありましたように畝状竪堀群を斜面に加えているということです。この立地は，こちら側が瀬野川で見通しがききます。瀬野川沿いにこういったものが3kmから数kmおきに

a　三ッ城跡（広島県・出城）

【スライド19】三ッ城跡全景

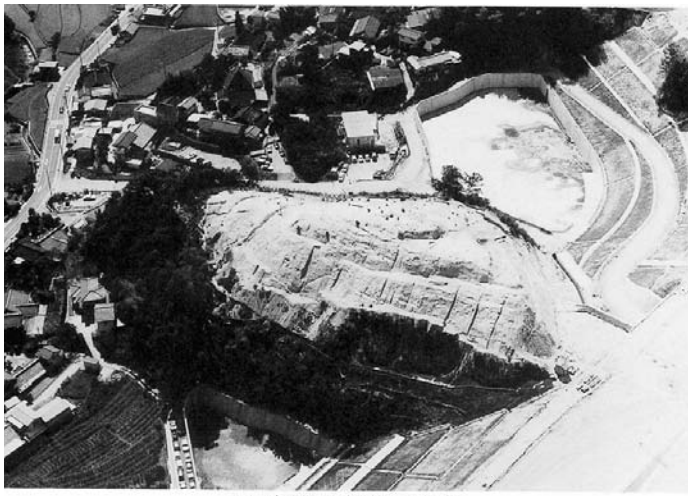
つくられており見張り所ではないかと考えられているわけです。これを中心部だけ図面にすると，このようになります【スライド20】。それで郭の中には何があるかというと，掘立柱建物が２棟しかない。午前中の牛の皮城跡では何もなかったんですけれども，ここにはかろうじて掘立柱建物がある。ここに黒い丸を付けてありますけれども，これは狼煙と考えられている遺構です。直径約１ｍの穴で，中に焼土と灰と埋土が相互に重なって出てきています。これが見晴らしのいいところにあって３kmから数kmおきにあるということで，当然見張り所の機能をしたものであろうというふうに考えているわけです。ここには，小倉山城跡とか恵下山城跡とか，そういったものと違って建物がほとんどない。だけども，こういった防御施設だけはきちんとしている。これが陣であります。



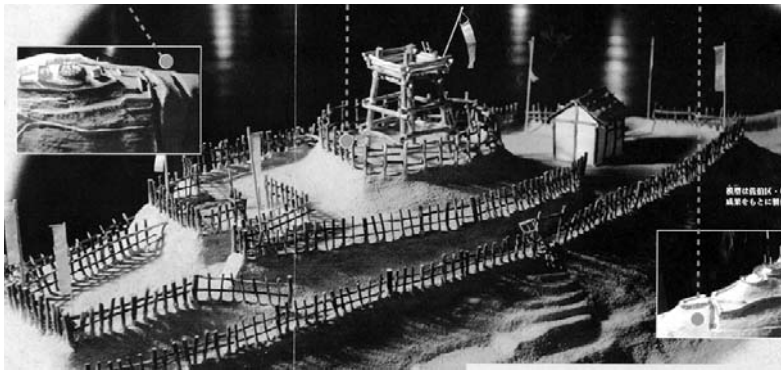
【スライド20】三ッ城跡実測図（部分）

これも同じく陣の例なんですけれども，広島市佐伯区石内にあります串山城跡です【スライド21】。写真で見たら，何かわけが分からないようなんですけれども，細かく見ていくと，こちら側に堀切が２条あります。こちら側にも堀切が２条あります。郭そのものは，こういうふうにはっきりしないものが一段，二段，三段とありますけれども，これにはほとんど遺構がないんです。かろうじてあったのが掘立柱建物です。ですから，先ほどの三ツ城跡と同じように，ほとんど遺構がないということです。

【スライド22】は，広島市文化財団さんがつくられた模型ですけれども，串山城跡がモデルですね。


b　串山城跡（広島県・出城）
【スライド21】串山城跡全景

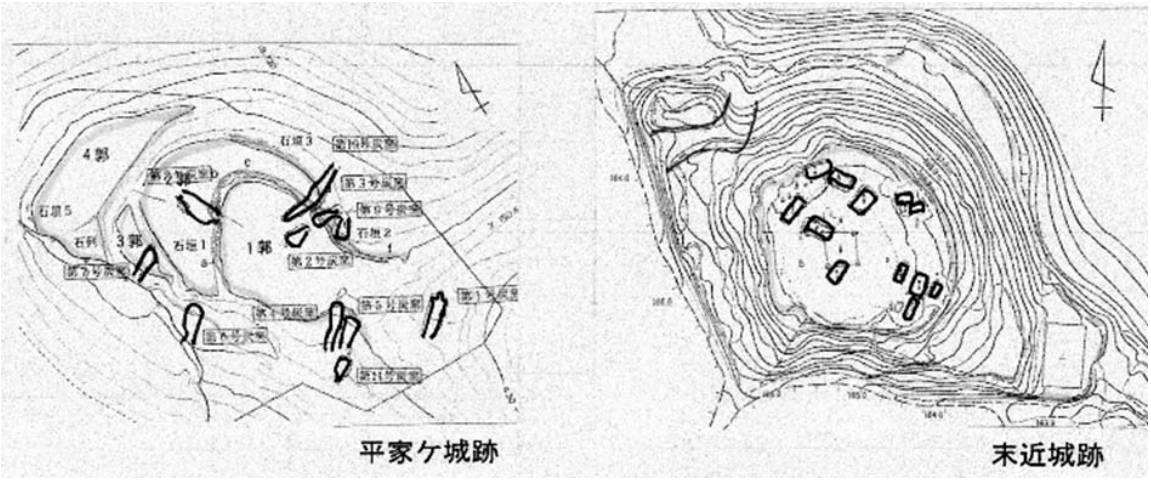
こういうふうに段があって，段の中にはほとんど何もない。かろうじて掘立柱建物が１棟ある。後ろに堀切ですね。前にも堀切があります。この復元には柵がありますけれども，現地の遺構では柵は見つかっていません。これは，斜面を造成してるので，あったとしても流れた可能性があり，あったか，なかったかは分かってないということですね。ただ，何もないんじゃないということでつくられたんだと思います。イメージとすれば，こんなものがあったということです。つまり従来の城のイメージとは，かなりかけ離れたものが陣といわれるものであります。



【スライド22】串山城跡復元模型

次に，もう一つの臨時施設の例である砦ですが，これは午前中の話にもありました尾道市御調町の末近城跡で，谷の中にある集落の中の裏の小山を利用したものです【スライド23】。これは，図面で見ると右側の図なんですけれども，たったこれだけなんです【スライド24】。郭そのものが，平坦面だけでほとんど何もないんです。城の遺構としては，何もないんだけれども，そこから現れたものは，ここにマーカーで書いてありますけれども，多数の墓穴です。つまり城の中に多数の墓があるということです。これはどういうことかと言いますと，もともとここに城の郭として使われた平坦面があったんですけれども，城が使われなくなった後，ここに墓をこしらえたんです。ここには土坑が10数基あり，その中で

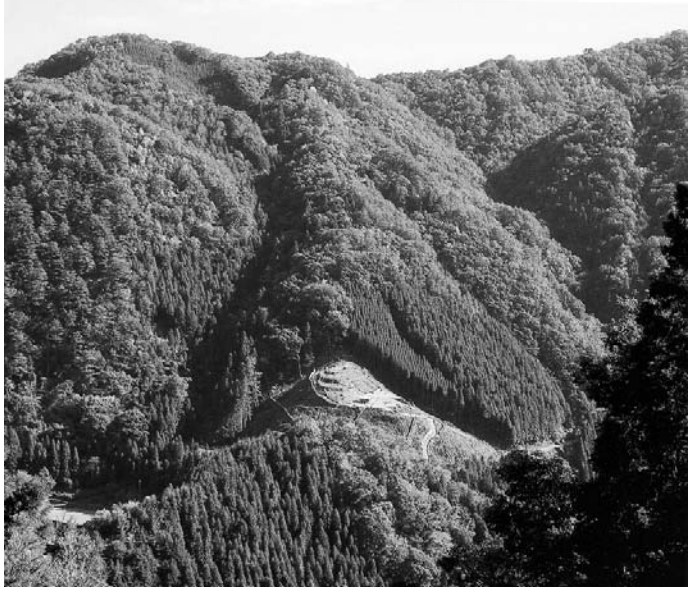
【スライド23】末近城跡遠景



【スライド24】平家ヶ城跡・末近城跡実測図

墓と確認されたものが８基ありますけれども，この８基というのは，家族や個人の墓にすれば多過ぎるわけですね。当然，これは集落にかかわる，共同墓地的なものということで，これは城とすれば貧弱だけれども，城の跡地を村の人たちが共有の施設として使ったもの，要するに村と非常にかかわりが深い場所と考えることができます。それで，こういった集落の裏山にあり，高さがせいぜい10ｍと低く，小さい郭が一つ，遺構がほとんどないものについては，村とのかかわりを考えた方がいいということであります。

これも，やはり砦なんですけれども，北広島町の戸谷と安芸太田町加計との境の鶉木峠にある平家ヶ城跡です【スライド25】。峠の道が城の下を通っています。この城は，【スライド24】の左側の図を見ていただくと，郭らしい平坦面が４段あります。この郭を掘るとその下から炭窯が11基ほど見つかりました。このマーカーで書いてあるのが炭窯です。城そのものの遺物はほとんど



【スライド25】平家ヶ隘路跡遠景

ありませんが，炭窯の年代は，大体14世紀から15世紀前半につくられており，炭窯を埋めて城にしているわけです。従って，城は炭窯より新しいということが分かります。御存じのとおり，一つの炭窯を操業するためには，相当広い面積の山が必要です。ですから11基もの炭窯ということは，すごい面積の山がいるわけですけれども，その山を個人が経営するとは考えられないと。当然，これは村とのかかわりということで，要するに村共同の炭窯，今で言うと工業団地ですね。村の工業団地を，それが使われなくなった後，城に改修してるということです。つまり，これも砦ですけれども，村とのかかわりが強い村の城という考え方ができるのではないかと思います。この城は，村境の峠に立地しており，当然のこととして見張りの役目も果たしたことも考えられます。

ということで，城にもたくさん種類があるわけですけれども，その城をこういうふうな種類別，機能による分類と時代による分類をしていけば，いろいろなことが分かってくるというのが，今日の話であります。

これまでお話ししたことをまとめ，データとして見ると表４～６になります【スライド26】。表４は安芸と備後で分類別に分けています。まず５つに分類しましたけれども，大きくは城と屋敷と陣と砦で４分類できるのではないかと思います。平城もありますけれども，これはもうほぼ例外的です。中世城館遺跡というと「城」といわれますが，こうやって全体から見ると城はそのうちの28%しかありません。案外少ないということですね。屋敷が結

表４　分類別の発掘城館数

国	城	屋敷	平城	陣	砦	計
安芸	17	21	3	23	21	85
備後	15	7		5	3	30
計	32	28	3	28	24	115
比率(%)	28	24	3	24	21	

表５　時期別の発掘城館数

国	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計	不明
安芸	11	52	7	4	74	21
備後	3	20	6	2	31	7
計	14	72	13	6	105	28
比率(%)	13	69	12	6		

表６　時期別・分類別の発掘城館出現比率

時期	城	屋敷	平城	陣	砦
Ⅰ	18	46	—	—	36
Ⅱ	31	17	2	35	15
Ⅲ	75	25	—	—	—
Ⅳ	13	37	50	—	—

【スライド26】広島県の中世城館の各種データ

構あって，陣と砦も相当量あるということで，城館遺跡といえば領主がいたところと考えられていますが，実際はそればかりではないということが，これで分かっていただけるのではないかと思います。

次に，表５ですけれども，これはそれを時期別に見るとどうかということです。

これは，先ほども言いましたように同時代史料で分かるものはほとんどありません。ですから出土遺物で見るとどうかということでありますけれども，これで見ていただくと，Ⅰは南北朝・室町期で15世紀前半以前，Ⅱは戦国前期で15世紀後半から16世紀前半，Ⅲは戦国後期で16世紀第３四半期，Ⅳは織豊期で16世紀第４四半期を示しています。不明と書いてあるものもありますが，それは出土遺物がない，あるいは少ないので分からないということですね。全体の約４分の１がこれにあたります。つまりそこで生活がなかった，生活痕跡がないということです。これを除いて時期別に比べていくと，Ⅱ期には69％があり，集中していることが分かります。

つまり，城館遺跡の大多数は，Ⅱ期の戦国前期，要するに毛利氏とか吉川氏，小早川氏などが勢力を伸ばしていく時期で，戦が多い戦乱の時期の100年間にあるのが最も多いということです。

それより古いⅠ期の南北朝とか室町時代のものは13％しかありません。

また，毛利氏がこの地域をある程度平定したⅢ期の戦国後期もほとんどないということで，これがⅣ期，つまり毛利氏が豊臣大名になると，その数はさらに少なくなります。

ですから，城館遺跡の種類による分布と時期別の分布を総合していくと，この地域の状況が，文献史料と同じようによく分かってくるのではないかと思います。

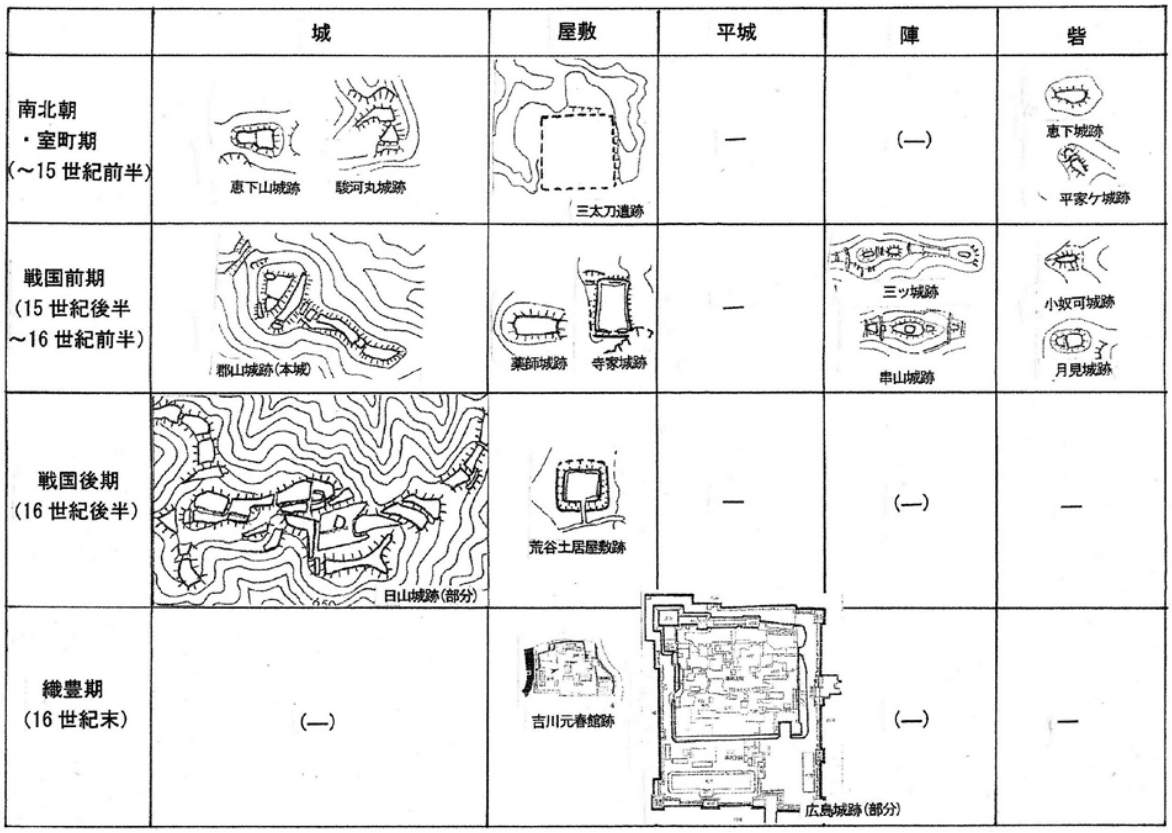
今度はそれを時期別，分類別に見ていきましょう。表６を見ていただくと，Ⅰ期の南北朝・室町期では屋敷が46％と多いのに城は18％しかありません。つまり城は日常的なものではなく何か事件があれば避難する場所，立て籠もるための臨時的な施設ということです。ですから，通常領主は屋敷に住んでおり，緊急時には城に立て籠もる

ということです。砦も36％と多くみられますが，これは小さな城と同様に緊急時に立て籠もる施設で，領主の権力が十分でなく，境目の地域など領主の保護が届かない村々が，それぞれを守るために，多く造られたと考えられます。

Ⅱ期の戦国前期は，これが様々なものに分かれてきます。城が31％と多いですけれども，城のほかに陣が35％と多くなっています。なぜ陣が多いかというと，これは戦乱が多いということです。本拠の城だけではなく，相手が攻めてくる，相手を攻めにいく，そのときには当然，そういった施設をこしらえます。そういったことでこの時期には増えてくるということです。

そして砦が15％ですけれども，砦はⅠ期とⅡ期しか見られません。これはなぜかというと，Ⅲ期の戦国後期になると陣や砦がなくなり，城の比率が75％と増えてくることでも分かるように，それぞれの地域の国人領主が毛利氏とか吉川氏とか小早川氏，平賀氏など，強い勢力の領主は残りますけれども，それ以外のものは大きな勢力に吸収されていく。そのことで地域が全体として安定する。それに伴って，砦をもっていた村の組織や村の自治も統制されてくるということで，砦も必要なくなってくる。要するにピラミッド型の領主権力のなかに組み込まれてくるということで，砦に代表される村の自治も弱くあるいはなくなってくるということです。ただ，屋敷は25％と安定的にみられます。Ⅳ期の織豊期には城館数が極端に減少するため様相が変わります。広島城跡や三原城跡などの平城や吉川元春館跡，御土居遺跡などの屋敷が特徴的で，それまでの城を改修して使用するものもあります。Ⅲ期と同様に小規模な陣や砦は見られません。

以上，いろいろとお話ししましたが，これを大ざっぱにまとめると，【スライド27】に示した編年表ができます。先ほども述べましたが，城は大体Ⅰ期の南北朝期から戦国時代のⅡ期，Ⅲ期と，だんだん小さいものから大きくなりながら発展していくけれども，Ⅳ期，織豊期になるとほとんどなくなります。屋敷は，全期を通じてずっとみられますが，立地によっていろいろな形があります。平城は，主要には織豊期に出て



【スライド27】広島県の中世城館編年表

きます。陣は，戦国前期に爆発的に増えますが，その前後ではほとんど見られません。もちろん例外的なものありますけれども。砦も古い時期だけということが分かってきたわけです。

そういったことで，地域社会を考えていく上で，城館遺跡は，領主との関係，戦乱との関係，村との関係と３つの視点で見ていく必要があると思います。

領主との関係では，先ほど言いましたように，Ⅰ期では日常的には屋敷に居住し，それに立て籠もるための城を設けるということです。Ⅱ期になって，きちんと維持・管理される城を持つようになる。これは小倉山城跡みたいなものですね。常に管理されて，そこで生活する施設を持つようになるということです。Ⅲ期になると，戦国大名によって中小の城はなくなり少数の大規模城に集約されます。中小領主の屋敷は存続しますが，普通の城はだんだんなくなってきます。Ⅳ期には，豊臣大名の城だけが残ります。

戦乱に関わる施設ですけれども，これはⅠ期にはほとんどない，あるいは分からないといえます。立て籠もるための施設を城と考えるか，陣と考えるかによって違ってきます。Ⅱ期には最も増えます。出城と陣城がありますが，出城には本拠城の周りにつくるもの，例えば広島市安佐南区祇園の武田氏の銀山城跡の麓には尾首城跡がありますし，安佐北区可部の熊谷氏の高松城跡の麓には寺山城跡があります。領地の境にあるのは，先ほど述べましたように広島市佐伯区石内の串山城跡とか伴東城跡，交通の要所には，これも先ほども述べましたが，広島市安芸区瀬野の三ツ城跡とか，東広島市福富町の福原城跡などがあります。

陣城については，これが陣城か出城かは，ちょっと分かりにくいですけれども，文献史料を参考にすると，安芸高田市吉田町の毛利氏の郡山城を攻める時に尼子軍が造った風越山城跡，青山・光井山城跡といったものがあります。風越山城跡は施設的には造成が不十分で，横堀のほかには平坦面があるだけですが，青山・三井山城では山頂から郭を連ねて恒久的な施設としています。

これがⅢ期になると，広島県ではほとんど見られなくなります。それは戦乱が例えば周防とか石見，出雲と他国で行われて，広島県内では減るということで，そういったことで陣城がなくなってくるということであります。

Ⅳ期になると，今度は豊臣政権と毛利氏との関係になってきますので，両勢力の境の近くにそういったものをこしらえる。例えば，福山市新市町の相方城跡ですけれども，これはもともとは在地領主の有地氏の城ですが，それがこの時期毛利氏の直轄城となって改修され陣の役目をするようになるということがあります。

次に，村との関わりですけれども，先ほども言いましたように砦がこれにあたります。これが全体の４分の１ぐらいを占めています。小規模で遺構は少なく，生活の痕跡がないものです。これは河川や谷筋に沿って点在する集落の裏山などにみられます。北広島町河戸の小奴可城跡とか広島市安佐北区飯室の恵下城跡とかが典型的な例といえます。

こうした砦は皆さん方，お宅に帰られて，都市部や住宅団地では無理ですが，周辺を見まわしていただいたら必ず近くにあると思います。

それと，そういった砦の機能を村の施設に変えた末近城跡の例，また，逆に村の施設を砦にした平家ヶ城跡の例もあります。そういったことで，Ⅰ期・Ⅱ期には砦が多いということが分かっていただけると思います。

このように，遺跡から砦を見てきましたけれども，文献史料でもこういった例を知ることができます。例えば，三次市では15世紀後半に年貢の減免要求をした「備後国櫃田村御百姓連署起請文」が残されていますが，これに加わった土豪や有力百姓たちが，それぞれ立て籠もったと思われる砦が川沿いの集落ごとに確認されています。

それともう一つの例は，世羅町です。これはもと備後国太田庄に含まれますけれども，そこでは「堀越惣中」といわれる惣の組織があり，そこではそれぞれのところに小さな城をつくったと。今でも神社地となった月見城跡があります。

そういったことで，古い段階，戦国前期まではこういったものがあったのにこれがⅢ期以降になると，なくなってくるということであります。

以上が広島県の中世城館遺跡の概要であります。ちょっと時間的に押してきましたので，これ以降につきましては，またシンポジウムのときにでもお話できるかと思います。

最後にお話しておきたいのは，中世城館というのは権力といいますか，武士だけのものじゃないということを分かっていただきたいということであります。権力と関わりの薄い村の城については，文献史料にあらわれることはほとんどありません。記録にないから事実がないのではなく，現地の遺跡も詳細に検討することによって事実は明らかになると思います。特に，発掘調査をはじめとした考古学的調査の細かい分類と編年という作業によって，地域のことがかなり分かってくると思います。ですから，そういった面で発掘調査を考えていただけるとありがたいと思います。

もう一つは，城館遺跡は地域の中心にあり目立つということで，地域のシンボルに

なることが多いということです。これは城館遺跡よりそれに関わる人物への評価となりますが，評価にあたって記録や伝承が無批判に行われることがあります。このための城館遺跡の時代や役割が過大評価され，更にはその地域そのものの歴史として語られることもあります。記録については，同時代史料による史料批判が必要なことは言うまでもありませんが，発掘調査のデータはより客観的な評価が可能となります。特に記録に残らない中小の城や屋敷，陣，砦など，地域との直接的に関わりを知るためには極めて有効だといえます。

そういったことで，県内ではこの教育事業団埋蔵文化財調査室をはじめとして発掘調査がたくさん行われていますけれども，城館遺跡の発掘調査の意義を改めて訴えたいというのが，今日私の話の趣旨であります。

どうも，ご静聴ありがとうございました。

出典一覧

スライド１・２・６・12・18・26・27：発表者作成。

スライド３：各城館遺跡発掘調査報告書より引用・作成。

スライド４：大朝町教育委員会『史跡吉川氏城館保存管理計画策定報告書』1990年　の図より作成。

スライド５：三浦正幸「古制を残した縄張」『広島城』歴史群像　名城シリーズ９　1995年　の図より作成。

スライド７・８：広島県教育委員会「恵下山城跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1997年　の図・図版より作成。

スライド９：広島県教育委員会『いぶき』中世遺跡調査研究ニュース29　2001年　の写真より作成。

スライド10：広島県教育委員会『小倉山城跡発掘調査報告』2002年　の図より作成。

スライド11・15・16：北広島町教育委員会提供写真より作成。

スライド13・14：広島県埋蔵文化財調査センター『薬師城跡』1996年　の図・図版より作成。

スライド17：広島県教育委員会『吉川元春館跡の研究』中世遺跡調査研究報告２　2001年　の図より作成。

スライド19・20：広島市教育委員会『三ッ城跡発掘調査報告』広島市の文化財37　1987年　の図・図版より作成。

スライド21：広島市歴史科学教育事業団『串山城遺跡発掘調査報告』1995年　の図版より作成。

スライド22：広島市文化財団『歴史の扉』９の写真より作成。

スライド23・24（左）：広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』2002年　の図・図版より作成。

スライド24（右）:広島県埋蔵文化財調査センター『平家ヶ城跡発掘調査報告書』1977年　の図より作成。

スライド25：広島県埋蔵文化財調査センター『平家ヶ城跡発掘調査報告書』1977年　の図版より作成。